
気ままに三題噺

.りと.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気ままに三題噺

【コード】

N0786V

【作者名】

りと

【あらすじ】

文学少女シリーズが大好きです
つてことで、三題噺やっちゃいます^^

お題はこちらからもらっちゃってます

<http://lightnovel.jpnn.org/contribution/tg/tgenerator.cgi>

7月21日 前

お題「チヨコレート 赤いワンピースの女 図書館」

恋人が死んだ。

まだ18歳で、やっと高校卒業したばかりだというのに。

彼女は俺の唯一の理解者だった。他人と関わるのを嫌い、一人で過ごすのが一番楽しいと感じていた高一の俺は、放課後はよく学校の図書館で過ごすことが多かった。

図書委員だった彼女は、いつもカウンターの前で楽しそうに本を読んでいた。周りを気にしてか、くすつ、と小さく笑ったり、感動する話を読んでいたのか、突然声を出して泣きだしたり、時には本に登場する人物に対して怒ったりしていることもあった。そんな彼女に俺はいつの間にか惹かれていたのだった。

俺は無意識に毎日のように図書館に来ていた。

「こんにちは」

彼女が俺に初めて声をかけたのは、一年の二学期の半ば。何にも考えず、図書館にやってきた俺にそう挨拶したのだった。

不意打ちすぎて、何にも声が出なかった。俺はただ頭を下げただけになってしまった。

「いつも図書館に来てくれるよね。本、好きなの？」

本が好きなわけじゃない。どちらかというと嫌いな部類に入る。眠くなるし、授業以外でたくさん文字を見るなんて御免だった。

「私は本が好きよ」

そんなこと知っている。

当たり前だ。あんな楽しそうに本を読んでいる姿を見たら、誰だ
ってそう思う。

「何の本がオススメなんだ？」

一言声を出すのにも緊張して無愛想になってしまふ。自分でも男
の癖になんて女々しいんだろうと思った。

「はい、じゃあこれ。おもしろいよ」

彼女のオススメしてくれた本はとてもおもしろかった。途中で眠
くなったりはしたが、なぜか読めた。

それから後も、俺は何度も彼女からオススメの本を教えてもらっ
た。そのたびに俺は自然と彼女と話せるようになっていた。

そんなある日のことだ。

「どうして、君はいつも一人なの？」

カウンターから離れて、俺と向かい合う形で、一般生徒用の椅子
に座った彼女が真剣な眼差しでそう聞いた。

俺は少し黙った。いつかくるだろうと思っていた話題だ。しかし、
具体的な答えなんか持っていなかった。

「わかんないけど、一人がいいからなんじゃないかって思う」
「そっか」

そう言って、彼女も少し黙った。周りには誰もいなかった。

「あのね」

何分沈黙が続いたのかは分からない。彼女がゆっくりと話し出し
た。

「小説に限らないけど、人は人と関わりあつてこそ成長することが
できる、っていわれることが多いよね。多分、大抵の人がこの意見
に賛成すると思うんだ。でもね、私は一人でいたっていいと思う。

何でかは分からないけど」

その言葉を聞いた途端、俺は彼女がとても愛しいと感じた。

「……」

彼女が俺の名前を呼んだとき、俺が彼女を抱きしめていることに
気付いた。

「好きだ」

いつも言うのを躊躇っていた言葉は一文字目を言ってしまうと、
その後は楽に言うことができた。

7月21日 前（後書き）

もうちょっと短くするはずでしたが、思ったより長くなってしまったので、前後編にしたいと思います

7月21日 後

それから、俺と彼女は恋人になった。

しかし、恋人とはいうものの世間で言う『恋人』とはちょっとずれているのかもしれない。

デートはしたことない。キスもたったの一回だけ。俺はそれで満足だった。今までどおり、図書館で彼女にオススメの本を教えもなかったり、ちょっとしたことであつたりすることができるだけでよかった。

彼女がそれをどう思っていたかは知らなかったが。

「え……」

三年のクリスマスのことだった。

滅多にデートをしない俺たちだったが、その日は彼女の希望で一日中外を回った。回るといっても大したことなかった。本を買うために、少し大きめの書店へ行ったりしたり、彼女の買い物に付き合っただけだ。昼だってファミレスで済ませてしまっただけだ。

それでもせめてクリスマスらしくしようと、夕食にとある店を予約していた。

店の雰囲気は高校生にとっては大人すぎるところであつたが、値段はそこまで高くなく、彼女は喜んで了承してくれた。しかし、彼女はその場所であつたことを告白した。

彼女は病気を抱えていること、年明けには入院すること、大学には行くつもりはないこと。

あんなに楽しそうにしている彼女が病気？初めはそんな風に冗談だと思っていた。たまにあるのだ。小説によくあるような話を使って俺を楽しそうに騙すことが。

しかし、彼女の顔はいつもみたいな楽しそうな顔じゃなかった。全く違う。真剣な目をして俺の目を見ていた。こんなしつかりと彼女の目を見たことはなかったかもしれない。目の先に涙が見えた。

「わかった」

その言葉しかいえなかった。

俺はなんて子供なんだろう。

それから、彼女のいない図書館に毎日行くもののカウンターを見えすぐに帰る日々だった。大学には無事合格することができたが、考えるのは彼女のことばかり。入院後、何回か面会には行ったが、毎日行くわけにも行かなかった。

そして、彼女は死んだ。あまりにも呆気なかった。何の病気がすら知らなかった俺は、電話でそれを聞いただけで、病院へ行こうなんて思わなかった。あの笑顔の彼女の青白い顔など想像がつかないからだ。

葬式には一応出た。その時も俺は彼女の死に顔は見なかった。

結局今でも思うのだ。
俺は本当に彼女のことを好きであったのかと。

「俺の名前を呼ぶ声がした。」

目を開けるとそこには赤いワンピースの女が立っていた。赤いワンピースというと、少し怖いイメージが付きそうだが、そうは感じなかった。むしろ、明るくて元気に見える。

「はい」

女は俺に近づくと、俺の手のひらに四角い箱を置いた。綺麗にリボンでラッピングされた箱だ。

俺はそれを開けた。

「チョコレート……」

中に入っていたのはハート型のチョコレートだった。
今まで2回もらった彼女のバレンタインチョコは、彼女が入院していたので今回はなかった。

「……あの」

俺は女に話しかけようと箱から目を離したが、そこには女の姿はなかった。

「ん…」

夢を見た。

赤いワンピースの女は彼女の霊か何かであったのか。そんなことはどうだっていい。赤いワンピースの女は俺が最後に見たときに、笑ったのだ。

彼女と同じような笑顔で。

e n d .

7月21日 後（後書き）

ふう
…

本当にこんなんでいいのか、三題噺ってWWW
組み立てつくらず、ノリでどんどん書いちゃったので、読みずらか
ったことでしょうねー…（苦笑）

とりあえず、一つ完成できてよかったです。

次はもうちょっと短く簡潔にしたいです^^

よんで下さってありがとうございますっ！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0786v/>

気ままに三題噺

2011年10月8日22時12分発行